

# 大決壊

〜百合香る夏合宿〜

「小説」イラスト

遠野渚  
Tohno Nagisa  
奥森ホウイ  
Boy Okumori



# 〜〜〜 目次 〜〜〜

☆≡一 章 目    今夜のおかずは先輩のショーツ

☆≡二 章 目    先輩のトイレになります！

☆≡三 章 目    二人で一緒にお風呂！

☆≡四 章 目    おむつを充てられる桃恵

☆≡五 章 目    保健室での初体験

☆≡終 章    二人のゴール地点

## ☆彡三章目 二人で一緒にお風呂！

洗い場にある小さな椅子に座ると、後ろから星那がシャワーをシャワシャワしてくれる。

「あーあ。せっかく綺麗な髪の毛が小便塗れじゃねえか。まずはシャンプーしてやるからジッとしてるんだぞ」

「あんっ、先輩のおっぱい、背中に当たってます♪」

「だからジッとしてろって。おっぱいがそんなに好きなら、あとで気が済むまで触らせてやるから」

「あはっ。約束ですよ♪」

「桃恵の髪、ふわふわしてて綺麗だよなー。ごしごしと、

「私は先輩みたいに真っ直ぐな方がいいですけど……」

「ボリュームなくて苦労するんだよ。こういうのも。さて、と。頭は……こんなもんでいいか。次は身体だな。隅々まで洗ってやるからな」

「そんなっ。自分で洗いますから」

「遠慮するなって。オレが小便漏らしたせいでも濡れなっちゃったんだしな」

「ほぐしたのは私ですけど……」

「あー、言われてみればそうだな。よし、それじゃあ、桃恵にもちょっとした恥辱を味わわせてやろうか」

「えっ、先輩から恥辱を与えられてしまうんです……？」

恥辱だなんて、まさかのキーワードに、桃恵はときめいてしまう。一体どんなことをされてしまうのだろうか？

「ボディークリームでヌルヌルにしてやるから覚悟するんだぞ。おっぱいを蹂躪してやる」

「あんっ。先輩、そんな……、指が食い込んできてますよおっ」

星那の手は、大きくて男の子みたいだった。

それでもしっかりと手のひらは柔らかくて女の子している。

そんな星那の大きな手が、桃恵の乳房に食い込んでくると、桃恵自身も信じられないくらいに歪んでみせた。

「わわわ。私のおっぱい、こんなに潰れて……んあっ、す、凄いです。先輩にじゅー

りんされちゃってますねっ」

「おお。おっぱいってこんなに柔らかいのか♪ 無限に指が食い込んでいくぜ」

「あんっ、くすぐったいです」

「ぐへへ、いいパイパイをしてるじゃねえか。こっちはどうなんだ？」

「あっ」

桃恵は思わず身体を縮こまらせてしまった。

それも無理もないことだと思う。

星那の男の子している指先が、少女の敏感な割れ目へと食い込んできたのだ。

桃恵の秘筋は、ふっくらとしているが赤ん坊のような佇まいをしている。

産毛さえも生えていなくて、シュッと刻まれた縦筋に桜の花びらが一枚乗っかっているだけの、正真正銘の『おまた』だ。

おまんこと呼ぶことさえもおこがましい、それほどまでに幼稚な秘筋だった。

「んあっ、先輩っ、そんなところを触ったら汚いですっ」

「どうしてだ？ こんなに可愛いのに」

「か、可愛いだなんて。赤ちゃんみたいで……それにすぐにその……エッチな気持ちになると……その……」

「んふ。もうこんなに熱くなってるじゃないか。ボディソープのヌルヌルじゃねえよな、これ。まだそんなに泡立ってねえし」

「はうう〜。先輩のおしっこ飲んでるときに、感じちゃいました」

「正直でよろしい。それじゃあ、桃恵の可愛いまんこを綺麗にしてやるか。シュシュッとな♪」

「あっ、あひっ」

星那の指先が秘筋に食い込んでくると、イタズラっぽく蠢く。その刺激に桃恵が耐えられるはずがなかった。

「らめですっ！ 先輩の指で変な気持ちになっちゃいます」

「オレの指先がそんなに感じるのか？ ふふ、オレもなかなか女泣かせだな。こんなことするの初めてなのに」

「先輩の初めて……あひっ」

「おう、初めてだぞ。まさかこんなに感じてくれるなんてなあ」

「だめっ！そこは敏感だからっ」

ダメだと言いながらも、桃恵は無意識のうちに脚をMの字に開き、赤ん坊のような割れ目を晒している。

まるで触って欲しいと言わんばかりに。

「ふふ。口では嫌がってても、身体は正直  
みたいだな。桃恵の大事なところ、熱くて  
硬くなってきたぞ。それに開いてきてる」

「先輩がエッチなことするから、ああん！  
ダメ、それ以上食い込んでくると、あ  
っ、ああん！」

「クリちゃんが大きくなってきてるな。そ  
ーれ、クリクリ～♪」

「ヒギイ！」

グチュグチュとエッチな音を立てなが  
ら、ボディソープが泡立てられていく。

いや——、

泡立てられているのは、ボディソープの  
泡だけではない。桃恵のエッチな体液も混  
じり合って、淫靡な音を奏でている。



女の子の気持ちよく感じる、優しく愛でるような愛撫。

「クリちゃんを感じやすいのか。ここはどうかな？」

「あ、ふっ、ふうう！」

桃恵の背筋が泡立つ。  
星那が、うなじを舐め回したのだ。

「れろお……。おお、桃恵の首筋、汗で酸っぱいな。それに日なたの香りが口に広がって、なかなか美味しいぞ。ぺろぺろ」

「あっ！ あっ！ あっ！ ダメッ！ なんか、変なのきちゃう！ も、もう……」

星那にクリトリスを弾かれたのがきっかけだった。

「がはっ」

もっと可愛い喘ぎ声を上げているところを星那に見て欲しいのに……。桃恵は股間から生み出される電流にむせてしまう。

「っ！ うっ！ うぐ！」

上手く息ができずに、桃恵は咳を堪えながら絶頂に絶頂を重ねていく。

「ふふ、オレの指がキュウキュウ絞めつけられてるぜ」

「おごっ！ 開い、ちゃ……あぐううう！」

桃恵は身体中を駆け抜けていく快楽に、身体を反らしてしまう。

そのM字に開かれた股間から、

ぷっしゃああああああ！

勢いよく黄金水が噴きだしてきたではないか。

「おおう、気持ちよすぎて漏らしちゃったのか？ クジラが潮噴いてるみてえだな」

「あぐっ！ うぐっ！ ぐう！」

「ははっ、止めようとしても無駄だぞ。桃恵のマンコがキュンキュン可愛らしく痙攣してるだけだからな。オレがほぐしてやる」

「うっ、ううう……！」

プシッ！ プシュッ！  
プッシュウウウウウ！



どんなに止めようとしても、桃恵の赤ん坊のようなおまたが虚しく痙攣するばかりだった。

そのたびに、勢いよくおしっこが噴き出してしまふ。

やがてその痙攣も弱々しいものになり、

じょぼぼぼぼぼぼぼ……。

勢いを失った聖水が股間の泡を洗い流し、赤ん坊のような秘筋が露わになる。

桃恵の股間は快樂にパッキリと割れ、ややグロテスクな花を咲かせていた。

「んふっ。どうやらオレのテクニックもなかなかのようだな」

「ふええ……先輩の指、凄かったですう……ひっく」

しゃくり上げるようなハッキリをすると、桃恵は力なく後ろに倒れ込んでしまふ。

そしてそのまま星那に抱き留められると、気を失ってしまうのだった。

ただ、失神しても女としての本能なのだろう。

桃恵の淫洞は、星那の指先を求めるかの

ようにヒクヒクと、いつまでも痙攣していた。

**体験版はここまでです！**

**ここまで読んでくれて、  
ありがとうございました！**

大決壊シリーズ・配信中！



